

【事例紹介】

京の伝統工芸からの学び



京都工芸繊維大学
浦川 宏 氏

京都工芸繊維大学は、いわゆる工学系教育に加え、芸術造形への興味や知識を所属学生に喚起させる教育を目指すユニークな工科系単科大学である。学内には博物館機能を有する「美術工芸資料館」が昭和55年に設立され、絵画、版画、彫刻、陶磁器、金工、漆芸、染織品、およびそれらに関する資料が多数所蔵されている。また、単なる所蔵品の展示ではなく、それらの多くを教育研究に活用されるように運営されている。本学学生にとって美術工芸品をより身近な存在に感じることが可能な施設となっている。美術工芸資料館のポスターの収集は質と量ともに注目を集めることとなっている。染織品については江戸後期からの所蔵が有り、素材、織り構造、染色に関する調査会が開かれ、その結果を公開している。

一方、本学は、優れたもの作りの人材育成を目指している。へりくだった意味ではないが、もの作りの“中級レベルの技術”に進んで携わる人材育成である。

本学は、盛夏に行われる五山の送り火の一つである「妙法」の山焼きが行われる山の南側に位置している。以前、長い間、私の机は5階建て5階の北側窓側にあり、8月16日には私だけの絶好の観光スポットとなっていました。

京都では、多くの伝統行事と伝統工芸に容易く触れることができる。これらの長年にわたる継続と伝承には敬意を表せずにはおられない。地元の京都衆からの支援とそれらに関わる人たちの揺るぎない努力とももの作りへの自信の賜であろうと推察される。

伝統工芸品の作製を行う技術者を、「伝統工芸の匠」と呼ぶ。もの作りを語る時に忘れることができないのが、この「伝統工芸の匠」の存在である。伝統工芸の技とそれにかかる情熱が師匠から弟子へと伝承されてきている。技とそれから生み出される伝統工芸品には、匠の自信と誇りがあるように思われる。このような匠のもの作りにかかる情熱と熱意を、学生に触れさせる機会を設けることは、学生が近い将来に行うであろうもの作りに対しても大切に役立つも

のだと考え、伝統工芸からの学びを人材育成教育に取り入れることとしました。

学生がもの作りの技術者として社会に従事するために必要な事柄の学問的・技術的部分の教育に関しては十分に行っているとの自負がある。しかし、匠のもの作りへの思いや情熱に関しては教育の対象と見ることはなかった。もの作りの精神論があるのかは知らないが、匠の熱意はそれに相当するようなものと感じている。

もの作りの技術、それに対する自信や誇りといった精神的なことがらが、これからのものづくり、最先端の物を作る際にも、非常に重要ではないかと考えるようになった。

京都工芸繊維大学の歴史に触れてみる。本学の前身は京都高等工芸学校と農商務省京都蚕業講習所にあった。京都高等工芸学校時代には色染科、機織科、図案科の3つがあった。これは、まさに、友禅染、西陣織、それらに必要な図案(デザイン)を指すに他ならない。その後、両者が1949年に京都工芸繊維大学となり、そこに色染工芸、繊維化学、製糸紡績、養蚕の学科が設けられた。1998年には先端ファイブ科学専攻が2010年に現在の私の所属であるバイオベースマテリアル学専攻が設置された。この2つの専攻で2015年に繊維学系、繊維学域を作り、繊維の教育や研究を行うという体制になり今に至っている。京都工芸繊維大学の元となる農商務省京都蚕業講習所の設置から100年、京都工芸繊維大学となってから50年という節目に「科学と芸術―出合いを求めて―」というスローガンで様々な記念事業を展開した。

これは「科学と芸術の融合」はありえるのかという議論の末に行ったものである。客観的な科学と主観的な芸術、人であればニュートンとゲーテ、これらの関わり合いがあるのか、ならばどのようなものかについての議論であったように記憶している。実際に測れる長さや重さ、時間といったものと、感覚として捉える言語や感覚、色や形といったもの、これらが合わさってわれわれはいろいろ感じ取ってい

る。このようなことから美と文化を意識した工学、ものづくりを考えようとなった。繰り返しになりますが、京都では伝統工芸が非常に身近です。その匠と学生たちが接して、何かを感じるか、何を吸収し、何を発信するのかに興味を覚えた。そして、アートオブジャパンプロジェクトと名づけた、伝統工芸の中から新たな価値体系を考えよう企画を実施した。材料や製品を扱う分野の学生は、科学と工学に一生懸命取り組んでいたわけですが、同じ大学にある建築、デザインを扱う造形の分野とは分断されているような雰囲気でした。そこで、材料系の視点から伝統工芸の新たな価値体系を確立したい、美しさを科学と工学という面から見よう、と考えるようになった。

具体的な目的として、学生が京の伝統工芸に触れる。さらに、その匠のものづくりに懸ける技術や情熱を感じることを取り上げた。

その経験を触れた伝統工芸の現状およびそれらを未来にどういう形で発展させていくかを考える機会を設け、異文化・異分野の学生グループでコミュニケーション能力の涵養を図った。

特にここで意識したのは、異文化、異分野コミュニケーションです。これまでは性能の良い、多機能な製品を作ればよかったわけですが、そういう時代ではなくなりつつあると思われました。携帯電話の業界人に聞いた話です。携帯電話を新しく作る際には、実際に作る人、購入者（使用者）、デザインする人、作るためにお金を出す人など、非常に多くの立場からの意見を聞いて決定させなければならないとお聞きしました。

このような時期に、文部科学省の「現代GP」の公募があり、学内グループで応募しようということになった。内容と。京都という場所柄、公募要領の中の「地域連携型」にしたいと思ったのですが、素早く他の教員に、そのテーマでの応募が認められていました。どうしたものかと悩んでいると、「実践的総合キャリア教育の推進」というテーマの存在に気づきました。我々の内容とも合致することからこのテーマに応募することになった。このテーマには、インターンシップ関連の応募がほとんどであったため、インターンシップとは異なる視点からとして高い評価を得て採択された。そのタイトルと概要は以下のようである

タイトル：『創造性豊かな国際的工科系専門技術者の育成—伝統からイノベーションへ・ローカルからグローバルへ』。

概要：本学には造形デザインを専攻する学生と材料

系、工学を専攻する学生が混在しており、京都という多くの伝統工芸がある場所に位置します。そこで留学生を加えて学生グループを作り、ものづくりを経験する内容とした。最初に行ったのは、華道の花器を作れという内容で、留学生と日本人をペアにしました。するとおそらく日本人だけでは決して出ないような発想が出てきた。「材料はなんでもいい」、「本学にあるものは全て使っている」と言うと、焼き物から紙や金属までいろいろ面白いものが出てきます。日本語をうまく話せない留学生もいますが、どうにかして伝えないといけない。日本の学生も英語でコミュニケーションを取ろうとします。当時は今ほど「英語を聞き話す」教育が声高に叫ばれていない時代でしたが、これには感心した。

この方法には、我々の思いと考えを学生に伝える効果が大いだと判断され、教養科目としてカリキュラム化されました。これらが次の3科目である。

「京の伝統工芸—技と美」

「京の伝統工芸—知と美」

「京の伝統工芸—知美技」（大学院科目）

これらは現在の人間教養科目「京の伝統文化と先端」の中核科目となっている。

「現代GP」の後「戦略GP（大学教育充実のための戦略的連携支援プログラム）」にも「文化芸術都市京都の文化遺産の保存・活性化を支える人材育成プログラムの開発・実施」が採択された。京都の複数大学と共同で京都の文化遺産の活用と保存を考えるものであり、その拠点となる京町屋キャンパス「ににぎ」を京都三条に設けた。当時のユネスコ事務局長ボコヴァ氏を町家キャンパスへ招待したことがありました。



図1 京町屋キャンパス「ににぎ」での茶会

次に学生が行った事例を紹介したいと思います。大学院科目「京の伝統工芸—知美技」で行われたART

COMPLEX 1928 です。

本学にはものづくりが好きな人が多く、実際に物を作り、売ることまでを学生に企画・実施させた。デザイン、売り方を考え、協力者を探し協力してもらい、これも京都三条で行いました。



図2 ART COMPLEX 1928

本学には地元京都出身の学生もいますが、遠く離れた地域から来る学生もおります。そこでもっと京都を知り、他の人に説明できるような知識を得るために、京都の町を歩き、さまざまなものに触れる機会を学生主体で設けた。

また、「京の伝統工芸一知と美」では留学生と一緒に、京都の伝統工芸のひとつである絞り染めに挑戦しました。



図3 京都古知歩 tour

絞り染めワークショップ



図4 絞り染めワークショップ

次はこいのぼりです。京都北部に手書きの「こいのぼり」を作る、日本で一人の職人が仕事しており、この工房を訪問して鯉のぼりを作製した。



図 5-1 鯉のぼりのデザイン案



図 5-2 鯉のぼりの作製



図 5-3 空に泳ぐ鯉のぼり

年に 20 くらいしか作れないそうで、いくらで売っているか尋ねると、ひとつ 20 万円と即答され、びっくりしました。

続いては 3 回生の「京の伝統工芸一技と美」ですが、繊維に関する伝統工芸「調緒（しらべお）」を取り上げます。学生の発表パワーポイント資料を添付しますのでご覧下さい。

鼓や太鼓を形作るのに用いられる縄である「調緒」ですが、現在では多くがナイロン製です。しかし、これは麻でないと言われていると本物の音が出ないと言われていました。学生グループがその工房へ出向き、調緒について調べてきました。鼓はなかなか音を出すのが難しいのですが、妙な学生が一人いて「私は音が出ました」と言っていました。調べた学生によるとこの調緒の値段は、8.7 メートルのオレンジ色の麻の紐が 3 万円から 30 万円と幅がありますが、それくらいするそうです。また鼓は装飾品としての価値もあり、高いものでは 1000 万円以上するそうです。

亡くなった山下雄治さんという調緒を作る日本で唯一だった伝統の匠ですが、こういう学生の受入れだけでなく本学の特任教授をお願いしたこともありました。

その工程ですが、麻をあく抜きしてやわらかくする。それを乾燥させてまたやわらかくする。そして縋う。これが難しく学生にはなかなかできない。しかし匠は非常に早くこれをこなし、感心しました。その後、染色、乾燥、そしてひげ切りという余分なものを切り落とす作業を経て完成します。

学生はこれを体験するだけでなく、山下さんに質問をしました。調緒の課題について聞くと、麻薬対策のため麻を自由に栽培することができず、簡単に手に入らない。そうすると、ナイロンなどの代用品を使うことになり、麻のような光沢が出ないといった困ったことがあるようです。また、匠の山下さんは後悔や挫折はなく、やりがいの重さ、喜びの重さを感じる。壁ができて、乗り越えてきた、ということをおっしゃっていたそうです。学生たちはものづくりにはこういう気持ちで取り組むものだということを感じ取ったのではないのでしょうか。

また、山下さんがおっしゃっていたのは自分の作品を「いいものだ」と言われると作ってよかったなと思うそうです。

本学の科目には、このように京都の伝統を実際に体験してものづくりの精神を養うという内容のものがあります。文部科学省の特別な予算が途切れてもソフトランディングで大学から手当てしてもらい、継続しているということ、あえて報告いたします。

京の伝統工芸 - 技と美 -

実践例(学生の報告)

調べ緒の値段

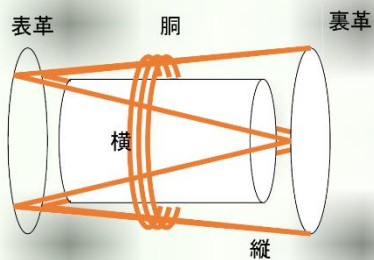
- 調べ緒の値段は...?
 - 1本(8m70cm)で約3万~30万！！
- 太鼓の値段は...?
 - 1つにつき約20万~高いものは1000万！！

調べ緒とは

- 太鼓を調律する麻製の紐
- 鼓面を安定させたり、音階を調律し、音色を整える役割がある。



太鼓の構造



山下雄治 氏 (山下慶秀堂宗家五世家元)

家業の工務店の手伝いで、先代である師匠の家を訪ねたのが弟子入りのきっかけ



1954年7月	調べ緒製作技術名人、山下慶秀堂宗家四世家元、山下秀次郎氏に師事、入門
1959年1月	山下慶秀堂宗家五世家元襲名
2001年9月	京都市伝統工芸専門学校講師任命
2005年	京都工芸繊維大学伝統みらい研究センターの特任教授

調べ緒製作64年、御年82歳でいまだ現役！

太鼓の音色

- 紐を張ることで音色が変化する



製作過程

- 水に浸けてアク抜き
- 踏んだり叩いたりして柔らかくする



製作過程

- 乾燥後叩いてさらに柔らかく



製作過程

- ひげ切り



製作過程

- 麻を絢う(なう)



完成！



調べ緒と長年向き合ってきて...

製作過程

- 染色
- 乾燥



調べ緒の課題

調べ緒...「麻」

麻薬対策の麻の無毒化栽培



調べ緒の光沢としなやかさの損失

山下さんの思い

挫折、後悔はしたことはあるの...？

ない！

やりがいの多さ、喜びの多さ。

たとえ壁が出てきても乗り越え続けてきた！

山下さんの思い

一番嬉しいと感じることは...？

「山下さんの調べ緒が良い」
と言っただけるとき。